

- 2099 矢野健太郎『ネコじゃないモン!』10 (集英社, 1984年, ヤングジャンプ・コミックス)

「アリスの絵はテニエル以外に考えられないように」

「(ドジスン* はテニエルの絵きらってたんだヨ)」

*ドジスン=不思議の国のアリスの作者、ルイス・キャロルの本名。

p. 96

- 2100 大和和紀『フスマランド 4.5』(講談社, 1985年, 講談社コミックスフレンド)
禁茶法施行下のフスマランドで禁じられたお茶会を開くアリス。今日も彼女は子ブタならぬマシンガンを抱き、FBIと銃撃戦を演ずるのであった。

「FBIだ! アリス・カポネ、禁茶法違反で逮捕するっ」

「ずんぐりむっくり! 右を援護しろ! 三月ウサギは左だ!」

p. 42

- 2101 わかつきめぐみ「文化祭戦争 演劇部復讐編」(わかつきめぐみ『不協和音ラブソディ』(白泉社, 1984年, 花とゆめ Comics) p.125-148)

某高校の文化祭。1年4組の演し物は、2名の男子生徒が女装で主役を演ずる「不思議の国の双子のアリス」と決定。強引に主役を承諾させられた二人の不満をよそに準備は着々と進行。そしていよいよ文化祭当日、舞台の幕が上がる。

「おねーちゃん、手紙きてるよ」

「どこから」

「不思議の国の帽子屋さんから、お茶会の招待状」

「ぬぁに〜、あの頭が常春気候の帽子屋ぁ!？」

p. 139

- 2102 和田慎二「キャベツ畑でつまずいて」(『別冊マーガレット』10巻6号, 1974年6月, p.188-217; 和田慎二『明日香ふたたび』(集英社, 1978年, マーガレット・コミックス) p.107-137)

キャベツ畑を歩いていた主人公エコと兄貴さまの目の前を、チョッキを着た白ウサギが、懐中時計を片手に急いで横切っていく。白ウサギを追いかけるうちにキャベツ畑でつまずいて、アリスの世界へと落ちこんでしまった二人の物語。なお、続編「キャベツ畑を通りぬけて…」(『アップルパイ』(徳間書店, 1982年3月, アニメージュ増刊) p.19-34; 『美少女まんがベスト集成』(徳間書店, 1982年, アニメージュコミックス) p.43-58) では、物語冒頭、ニューヨーク、セントラルパークのアリス像の前に、不思議の国への入口が開く。